

三河アララギ

平成二十八年

三月号

第六十三巻 第三号



ニューヨーク日記(113) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Empire State Building in Thanksgiving Colors November 26, 2015

Blue Shoe Diaries



エンパイアステートビルは色々な色でライトアップされます!イベントのプロモーションや祝日に合わせたり。今日はサンクスギビングデーなので秋の色!サンクスギビングデーの夜から大セールが始まるのがアメリカの習慣。どんな具合に人々はショッピングに励んでいるのかなって怖いもの見たさに散歩していて空を見上げたら満月でライトアップされているエンパイアステートが特に綺麗だな～

The Empire State Building can be lit up in many different colors. It can be a sponsored event that lights them up, or a holiday like today. Today is Thanksgiving Day so you can see fall colors on the building! Thanksgiving evening has become the beginning of Black Friday. With unusual warm weather, we decided to go for a walk near Macy's just to peek at how people were attacking the sales. When I looked up at the sky, I noticed that it was also a full moon! Isn't the Empire State extra pretty tonight?

目次

第六十三卷第三号(通巻七四七号)

表紙・壘	今泉 由利 (1)	稲吉 友江 (24)	今泉 由利 (32)
ニューヨーク日記(113)	Blue Shoe (2)	鈴木美耶子 (24)	米田 文彦 (33)
ノボタンの窓	御津 磯夫 (4)	吉見 幸子 (24)	植村 公女 (33)
歌集「はゝぎくさ」	大須賀寿恵 (5)	牧原 正枝 (24)	田中 清秀 (34)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	岩瀬 信子 (24)	『酔いの徒然』(47)
猿島	岡本八千代 (7)	石田 文子 (25)	本からのあれこれ(4)
無限	今泉 由利 (8)	森 厚子 (25)	ある自然科学者の手記(46)
新春の空	弓谷 久子 (9)	山崎 俊子 (25)	絹の話(64)
門松	内藤 志げ (10)	三田美奈子 (25)	短歌に詠まれた茂吉 五十四回
お年玉	安藤 和代 (11)	水野 絹子 (25)	楽しい時間(40)
4羽鶴	林 伊佐子 (12)	牧原 規子 (25)	「楽しくマナー」⑨
熱海桜	鈴木 孝雄 (13)	東洋大学 (26)	『歴代天皇御製歌』(五十二)
独り占め	森岡 陽子 (14)	夏目 勝弘 (28)	『歴代天皇御製歌』(五十三)
真紅	清澤 範子 (15)	森岡 陽子 (28)	『歴代天皇御製歌』(五十二)
思いも寄らず	伊藤 忠男 (16)	今泉 由利 (29)	「氷魚」のことから(182)
一輪の梅	足立 晴代 (17)	柳田 皓一 (30)	「土に思うこと」
丹野城	白井 信昭 (18)	山元 正規 (30)	編集室だより(二〇一六年 二月)
申歳の正月	近藤 映子 (19)	山迫 京子 (30)	三河アララギ(56)
大寒	阿部 淑子 (20)	森岡 陽子 (31)	ことのはスケッチ(47)
月桃	杉浦恵美子 (21)	松本 周二 (31)	今泉 由利 (58)
コサージ	山口千恵子 (22)	田中 清秀 (31)	和菓子街道(113)
ゆく年くる年	夏目 勝弘 (23)	重野 善恵 (32)	平松 温子 (59)
『いとよせ』	いーはとぶ (24)	小柳千美子 (32)	お知らせ・「三河アララギ」について (60)

ノボタンの窓（昭和二十九年〜昭和四十年） 御津磯夫

道元のよはひをとにも去年こえて来り籠れり一夜短し

おもかげにたちくるものを言ひ合ひて水越す岩をたちて見たりき

冷蔵庫の中にともれる青き灯にしばらく映えてわが妻のゐる

水底にあひいとなめる蟹二匹わがのぞき見る事實唯眞として

野ぼたんの蕾ある苗抱きつつわれはこの人のあとをしゆかむ

うつたふる動悸無視して立ちいづる月蝕のはじまりし光の中に

椅子の上にまどろみをれば背後うしろより妻が手わたす柿の半分

言葉にてわれは写生といひ君は形の外にあるものといふ

古の書に残れるわが海の水や絶えしこともいぶかしみせず

おのずからあした眼ざめて息づくをあやしみもせず春となりたり

歌集「はゝきくさ」II

大須賀寿恵

賜ひたる湯呑に玄米の茶をつぎて辞書を引きつつ原稿を書く

秋の空蒼しと思ふ時ありて吾スモン病の癒えつつゆかむ

十年経ち知覚も色も常ならむ肋とりしあとおりをりに撫づ

昨日より吾の左のポケットにかすかに鳴れる芙蓉の実二つ

坪野橋渡れば海苔の匂ひして海苔ゆり洗ふ人等群れ居り

煤払ひもせず正月を三度迎ふスモン病になりし年より

年末休暇となりて臥しをり吾が庭に子等の干したる海苔乾く音

床の中に足すり合わせ左足の今朝も利かぬをたしかめてゐる

かけ声して床より我は起き上る今朝の寒さに足のしびれて

歌集「草々」

今 泉 米 子

草のもみぢにすがりのぼれる土手の上高円春日大佛の屋根

相共に坐るところの決りゐてその時々^の天のひかりを

たまさかに風花舞へり坐りつつ紬の着物あてもなく解く

びんぼふ葛のビンバフビンバフ片言にわがひく草にまつはる麻由子

みちの辺の草の花にも心向かふ乙女となりて育ちゆくべし

みちのくの七色独楽を一つづつ廻してみたり今夜疲れて

生れくる幼きものへの毛布など百日^{ももか}かかりて届きしと云ふ

耳のかたちもわが家のものブエノスアイレスに生まれたる児に写真にて逢ふ

待宵の昨夜の花に蝶二つ相まつはりて止まらなくに

アルゼンチンの赤埴いろの壺にさす五月雨桔梗のただ一花を

猿 島

蒲 郡 岡 本 八 千 代

猿島に猿はをらざり猿島は朝あかねする空と海の中

猿島に茜だんだら広がりて海もたちまちだんだら茜

猿島の南の向かうは知多の海そのまた向かうは三重の伊勢海

目の前の今朝の潮うしほの静かさよわれにかつての思ひで浮かび来

「潮騒」の三島由紀夫の島見えずしろじろとして遠々の海

今日の会に絹編み赤きソックスを穿きて来たるに誰気づかずらし

夫とわれ運命さだめはいつしか六十余年自然じねん法ほう爾の二人の不思議

ま夜中に氷雨降りしか朝の庭に雪の粒々光るきらきら

猫ココの姿は見えずにはや五日事いつかあるごとに猫の名呼ぶわれ

猫の名を呼びつつ歩く近所の路われはそんなに愛してをりしか

無限

東京 今泉 由利

勢いとユーモラストと繊細とひとつ絵画の一羽雄鳥おんどり

カモミールの香りのなかに過ぎてゐるこのままこのまま夜となりゆく

弦月にほんの少しは近付きぬ三十階の窓にゐたりて

地上より百二十メートル上空に右も左も窓続きをり

那智黒の海の巖に碎け波とび散る白白高々真白

ルーペもて小さき点を凝視するベニクラゲの今日はポリプ

神滝の飛沫のなかに一つ虹二つ虹あり消えてはゆかぬ

神滝の水受けし杯ポケットに仕舞ひありつつ帰るかゆかむ

明けてくる朝の光の乱反射真白き雪の真白き景色

ものは皆白くなりゆく朝にて無限かとみる雪の結晶

新春の空

豊川 弓谷 久子

あの峰は本宮山か病院の窓より見渡す新春の空

九階の窓より見下ろすあの道は我が故郷へと続く道

絶食の果てがこれかと驚きぬ鏡の中にうつる我が顔

三ヶ日もいつか過ぎをり半月ぶり我が家の私のベッドなり

再びの出番となりぬ子とともに選びし振袖今日孫が着る

紫地に白き牡丹の花柄の子が成人式に着たる振袖

我が手にて着付けてやれぬ口惜しさよ今日はみさとの成人の式

七五三の写真と今日は入れ換へむ振袖姿のみさとの写真

初仕事に重ね着一枚縫ひ上ぐるまだまだ縫えるまだまだゆける

少しづつ体力戻るか薄紙をはぐようにと言ひし母を憶ひぬ

「野も山もみな白妙の雪景色」昔覚えし科白が浮かぶ

穏やかに今日晴れ渡る御津川に添ひて歩まむ足踏み締めて

門松

豊川 内藤 志げ

元日に玄関の靴靴の中赤と紺とが初の客なり

みな帰り一人炬燵にガラス越し粒よき金柑風に揺れをり

ここよりは日陰の径なり薄氷り腰を屈めて歩を進めゆく

スリガラスの明るき小窓に十五夜と思い浮べて風呂の中より

雨止みてねずみ色なす雲迅し予報通りの寒さとなりそう

簗を傾け起し傾けりせわしき動き廊下より見ゆ

弓張の低き山並は雲の上雨の止みたる朝の歩みに

スリガラスの小窓明るし寒の月見えねど思い浮べていたり

丈高くたわわに実りし万両を氏神様にとわれは勧める

太き竹に添えし万両うつりよし金山神社の今年の門松

お年玉

豊川 安藤 和代

栗南瓜ことことコトコト煮る窓に冬至の昼の白き月あり

ちりめんじゃこにたこ一ぴきが混りいて三人の孫が大騒ぎする

クリスマス吾家もサンタが来ましたよ私にも来た絹のスカーフ
派手目なるスカーフルンルン街行けば七十二齡の胸はときめく

農道が市道となりて早朝を観光バスが三台もゆく

幼き日遊びし神社の境内を緊張胸に新春の朝

ひと口の若水体にしみ透り元気パワーがみなぎりてくる

高価なるおせち重より吾作る煮物おなますリクエストあり

手術から二度目の春よ夫は孫にお年玉渡す最高の顔

辛党の夫もいつしか鏡開きのおしるこ旨しとおかわりの声

鶴もからすも啼きぬ今日ひと日雲も動かず冬深みゆく

それぞれの道歩みゆく孫達に唯ただ祈る健やかであれ

千羽鶴

岡崎 林伊佐子

生まれくる双子のひ孫を待ちながら炬燵に入りて千羽鶴折る

ひとつひとつに安産ねがひて折りてゆく千羽の鶴の和紙のいろどり

娘にも嫁にも折りし千羽鶴すこやかにして孫にも折りぬ

一月の二十一日に生れたる双子のひ孫のよく似た寝顔

笑顔にて日々を暮らしぬ三世帯ころ安らぐ老いの幸せ

濃みどりの葉かげに咲きし寒椿くれないの花初雪のせる

見む人も無きふる里に帰省してあるじの如く木枯らし迎ふる

芒穂は風に打たれて打たれ立つ山道あるく寒きふる里

何事もあるがままにて生きのびし突発難聴の半生おもふ

廃家の並びて残れるふる里は廃墟となりし世相の変移

熱海の桜

沼津 鈴木孝雄

寒入りも富士山の雪やせ細るロウバイ香り椿満開

狩野川の朝の静けさ鶉一羽ぱたぱた音立て水面を走る

熱海桜大寒の日にはや満開春の訪れ糸川を歩く

この冬は暖かいねで始まって寒い寒いではや睦月いぬ

寒暖の波の大きく乗り難し今後はぶれが常態覚悟

ヤロウレッド元気の無さが気にかかり根本を掘るとネキリムシ二匹

初春の日差しを受けて春菊が瑞々しい葉を急に伸ばしけり

混み合った野菜のどれを間引くかは人事のごとく迷いけるかな

大霜でソラマメの頭しおれるも陽当たり受けてシャッキと戻る

ハウレンソウ寒の戻りて甘さ増す霜も利用し逞しく生く

独り占め

東京 森岡陽子

寝室に青白色の届きたりシリウスの色独り占めする

冬深夜清しこの夜ラジオから益々輝くシリウスの青

天窓の左隅より月が消え真ん真ん中にシリウス輝く

人人で賑やかだった清里はホテルも錆び付くゴーストタウン

冬の日に深大寺へと墓参りよみにゆきたる十三匹の犬

箱根路を越えた選手を迎えるは増上寺前声援一層

狒猿のによこんと坐る日枝神社今年の干支の申が御遣い

人に馴れ何だか友達青鷺も忘れぬ本能睨む目恐し

都庁より見下ろすビルの雪景色どこもかしこも白白白し

一月も早く開いた紅梅に雪降る予報耐えろと伝え
ひとつき

真紅

春日井 清澤 範子

磯夫先生の歌碑の絵葉書見てをりぬ撫で肩の石に文字似合ひて

午前六時東の空にあかね雲眺めながめて朝餉の仕度

一月の中ばになりてようやくに最低気温下りくるなり

午後三時過ぎれば雨戸に風吹きてコトコトと鳴るリズムがありぬ

雨戸開ける夫はわたしに声かける椿が真紅に咲きてゐるよと

春咲きの椿なりしも暖冬に上向き下向き花開く見ゆ

夫の髪カットするのも吾がつとめ鋏とバリカンにて見映え良くなる

朝の陽は南天の実を赤く染め南の庭に差し始めたり

リハビリに歩きたけれど風強しラジオ体操無理なく運動

新雪の積りし朝の冷える中ピロピロと鳴く鳥は何鳥

思いも寄らず

大阪 伊藤 忠 男

東山白く染めたる初日の出行方占うこの年の年

神前で初日に向かひ約束を誓う風習無駄とは言えじ

右足の痛み痛みて立ち止まる如何になるのか何が起きたか

温泉に足付け伸ばし揉みほぐすこの日来るとは思いも寄らず

振り絞る余力残るか我が身体足痛だけで気力削がるる

キャリバック力預けて横で引く杖替わりとは思ひも寄らず

纏持ち芥子と枘にて火消なり江戸に洒落気忠相の策

食欲の衰え老化病かも楽しみ一つ減るが悲しや

研究のテーマ引き継ぎ気力また引き継がれしは幸せな年

待ち合わせ進まぬ時計見てばかり会えば時間早く経つのに

一輪の梅

東京 足立 晴代

夜半の雪積りし庭に健気にも一輪の梅蕾ふくらみ

北国の屋根に重なる厚き雪老いたる人の命奪^{うば}いたり

年明けて郡山へのバスの旅安全運転快適に終わりぬ

郡山より会津若松ひた走る息子の運転命がけなり

被災後の磐城の海を眼のあたり津浪のあともどかなる海に

初春は海静かなり浪の音磐城の浜も今年和やか

漁村の復興めざましく団結心と底力を知る

情報も様々ありて惑はされしが真実見たり現地の姿

早や卒寿迎えし吾は今だ未だ心は変らず若き日のまゝ

雪解けの道歩き行く若き娘長靴はきて手には靴もつ

丹野城

豊川 白井 信昭

夕空の黒曇茜に染め上げて入りゆく太陽はその向かうにあり
階段の枯れ落ち葉いとど散り積もり丹野城山土塁^{あと}址まで

社近くわが角口の交差路に黒の実落とす鳥いまだ見ず

早生蜜柑年の内にも持ち来るかダンポール箱用意しておく

年明けの音羽の川は穏やかに常と変わらぬいつもの散歩

音羽川入り江の用水行く水の絶ゆることなくいにしえよりか

潮入りの佐脇浜に勇いし葦の枯れ葉に風わたるなり

今朝はこの冬一番の寒さなりシラス獲る小舟川に幾隻

フエンス越し白梅の香の香りきて昔話の地主を偲ぶ

冷え著しき朝起きの窓眺めゐる外は一面白銀^{しろがね}の世界

申歳の正月

名古屋 近藤 映子

初日の出東の空の雲間より光まばゆく二千十六年の朝

三ヶ日晴天恵まれ正月のゆつくり時間は久しぶり

七草を早くも迎え新年の晴天続く寒さも寒し

吾は八十歳の正月と窓越しに見る日ざしは暖く

八階の窓越し日ざしは暖かく部屋に入れたる亀はおとなし

吾もまた人なれば婆々となり孫のバーバの声に苦笑する

寒に入り寒さも寒し申年の睦月半葉も晴れて過ぎぬ

月日の流れは早きも夫の三回忌は二月にせまれり

八十を数える歳と成りたれば我生活行動は狭く成り行く

成人の日過ぎたれば大寒迎えその冷えは我血圧を急に上げ

大寒

横浜 阿部 淑子

大寒に入りて雪国積る雪怪我人故障車いや増す報道

氷結で断水続き校庭は飲み水を待つ長蛇の列よ

大雪の予報に反し空青く車窓より見ゆ一瞬の富士

地道なる稽古報われ琴奨励菊日本を湧かしつ賜杯を抱く

日本の若きサッカー代表は反骨一丸勝利を掴む

月 桃

蒲 郡 杉 浦 恵 美 子

新たしき年の始めの家持の歌を愛せし夫を想へり

夫の居ぬ年の始めも五度目なり未だ慣れたと言へないけれど

我が母の雑煮の味を夫が覚え今はわたしが受け継いでゐる

我が母の味を再現してみてもこの次誰に伝へむものやら

正月の独り暮しの所在なさ新聞読んでもテレビを観ても

初雪が一面我が家を囲ひけり朝刊取りに出でておどろく

朝刊を最初に開くは夫なりきそれ故今も気が引けること

何十年続いて来たる習慣が今は時折追憶の中

月桃の葉の香漂ふ市場にてカーサムーチャーひとつ求めぬ

カーサムーチャー沖縄の餅ひとつ手に緋寒桜をいざ見に行かん

コサージ

豊川 山口千恵子

庭の草搔きゐて小蛙堀り出しぬ傷つけたかもしれないぬそつと埋めをく

晴れわたる冬の光をあびて立つ千年経たる観音寺の楠

みわたせば雲一つなき冬の空今年も一年はや終りゆく

仰ぎ見る雲一つなき冬空に伸び立つ桜小さき蕾

正月をわが家に集ふ孫四人スマートフォンは手離せぬらし

荒土に芽生えて青き小麦の畝冬の光に日々伸びてゆく

一面の雪に被はるる白き原雪の消えれば何ごともなき麦畑

シクラメンの季節終はれば温室にカーネーションの鉢並びゐる

朱の色のフェルトふはふはコサージはクリスマス会の孫のプレゼント

コサージは我には少し派手めかな胸に付けみれば心はなやぐ

ゆく年くる年

豊川 夏目勝弘

細さいの枝に莢実を残しゐるネムの一木が我が庭の立木

六坪余の空間のみが庭なりき枯れしアジサイとサツキの丸刈

冬草の小さき緑が軒下に今日大晦日の六坪の空間

南向きの我が書斎には冬の日の恵みは僅か二時間

手の届く所に必要な本を置き時には香り煙を楽しむ

たちまちと思ひし一年を省みずカップのソバにて今年のゆきたり

餅三切れの雑煮を作ることのみがこの一年の仕事始めぞ

産土の神に詣でて吉祥の山より昇る初日に向ふ

赤白のジャガイモ蒸して少々の酒にて一人の新年を祝ふ

耐え忍ぶが六波羅蜜多の修業とか自ずと出来るを幸いとする

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

この自転車乗る主もをらず車庫の隅埃かぶりてそこに在りただ
朝刊を配りし若きに礼言へば軽く会釈しバイクで去りぬ

稲 吉 友 江

首かたげ見れどもなほも傾きをりピサの斜塔に思はず両手を
わが記憶おぼろのままに黄葉もみぢの径永観堂へと独り歩めり

鈴木美耶子

小ぎつねを演ずる幼は会場の我ら見つけて手を振りくれぬ
預けたる休耕田をけふも又遠くより見る田畑の様子を

吉 見 幸 子

赤茶けし聳えたちたる溶鉱炉この室蘭に「大地の子」思ふ
何本も煙突建ちし室蘭の煙の下には働く人々

牧 原 正 枝

久しぶりコーヒーの香り広がりて昨日の諍ひうすらぎゆくかな
ラジオからなつかしい言葉通信簿今もあの頃が一番よかった

岩 瀬 信 子

歌会の机の上の椿一輪淡きもも色「高嶺の雪」とぞ

からす瓜つる延ばしつつ色を増し年の瀬近き風にゆれをり

けふの日の小春日和りに咲く桜四季桜の花は恥づかしげのやう

暖かき冬の夜道はあかるくて仰げば十五夜トナカイゐるかも

動物園の冬の夕暮に人少なし鳥の声のみけたたましくなり

この朝の光りの中路端^{みちばた}の月見草の金色にして

孫に押され漸く上れり奥の院のけはしき石段女人高野の

濡れ縁にうからと並び坐りたり白砂まぶしき一休寺庭園

師走半ば小さき花花の四季桜見むと小原の川見薬師寺に

夕暮れに影黒々と鴨の群波間に漂ひただ時の過ぐ

スマホなど進歩は望まぬ我なれど娘の利用に乗っかつてをり

朝市に並びたる魚のあれこれは時の流れと共に変はりつつ

石田 文子

森 厚子

山崎 俊子

三田 美奈子

水野 絹子

牧原 規恵

現代学生百人一首

東洋大学

ボランティア流した汗は広島の復興うながす希望のしずく

ノートルダム清心中学校二年(広島県)

望月

晴

「明日から」言って母にあきれられ「あんたの明日はいつくるんかね」

ノートルダム清心中学校二年(広島県)

和久井七海

江波車庫^{えばしやこ}にひっそりと住む車庫の主ほこりを被った被爆電車

広島学院中学校二年

重信

圭^{けい}祐^{すけ}

私でも何かの力になれるはず土砂に飲まれたあの街のため

広島市立舟入高等学校一年

市川

海^み里^{さと}

まだいけるスタンドからの声を聞き一球捕えたフルスイング

広島県立戸手高等学校三年

横田

実^み沙^さ

機械にも命を吹き込む職がある憧れて今機械科にいる

広島県立広島工業高等学校一年 倉知 拓海たくみ

木材も生きているから狂いが出る木の気持なら分かってやれる

広島県立広島工業高等学校一年 福重 虎星りゅうせい

実習着洗濯で落ちぬ黒いしみ機械油の汚れは勲章

広島県立広島工業高等学校二年 池田 修哉しゅうや

弓袋を三重にして清拭へタオル絞ると掌火照る

広島市医師会看護専門学校二年 小川 美穂

母の声さみしいときに電話鳴る私の気持ちどこで見てるの

広島市医師会看護専門学校二年 堀川 ユリア

私の一首

百余年に絶えしも残れるも新らしも森となりゐるその庭のなか

夏目勝弘

長塚節の写生文「我が庭」を書斎から見たく再び生家を訪う。書院造りの書斎は今は節の諸々が部屋一面に並べられている。

床柱のヤシの木、チンクグリの黒柿等々に目がいつてしまう。

写生文を思い出しつつ西の濡縁に立ち森となつてしまった庭の隅から隅まで、ゆつくりと視線を移す。秋の日差しも差し込まない木立の下で、何も思わず考えず時を過ごした。

歌舞伎座の小挽町とふ広場には評判なるは家紋の匠

森岡陽子

歌舞伎座の下階にある祭広場には、色々の土産物を売る店が並んでいる。歌舞伎揚げ煎餅、饅頭等菓子類から、役者の隈取り手拭からストラップ等特長のある歌舞伎役者の物が並ぶ。その中に家紋屋がある。根付の様な物から門や玄関の装飾用の大きな物迄並ぶ。店主の匠は日本中の家紋を全部把握し、質問に答えてくれる。我が家の亀甲形に九枚笹の家紋は既成ではない珍しい物らしいが、匠はこの家紋について細かく説明してくれた。父の故郷を思うと、本当に納得出来るものだった。嬉しくなる。

右大文字左大文字それぞれの山のふもとに近付きにけり

今 泉 由 利

何だか訳が分かりそうにない、そんな気がしたから、少し変えてみた。

右左大文字山のそれぞれの山の麓に近付きゆきぬ

京都、縦横にドライブして下さる友人に右大文字山と左大文字山の、それぞれ山の麓に近付いてみたいことと、鴨川と賀茂川となるべく辿つてみたいこと。そんなお願いをした。

もうすこし分りやすく、心に沁みるように出来るとよかつたな。車で通り過ぎてしまった故か……とも思う。右大文字と左大文字と、大文字が燃えているのを走り回って見た日があつた。

燃えてない昼間の山も、とても興味深い存在だった。

『俳句』

夕暮のしかと水脈引く小鴨かな
福寿草かぎりなき福あるごとし
初雪の降る気配聞く目覚めかな

柳田 皓一

風花や茶店一つの国境

山元 正規

赤べこの首振るひかり春隣

散り終へて寒林の空軽くなる

元朝会金欄袈裟の僧の列

山迫 京子

雪解や命育む水の旅

蹲踞の水溢れゐる春隣

都庁より初雪の屋根見下せり

森岡陽子

猿ぼを今年の干支と吊しけり
残り葉に蕾膨るる春隣

人波の上をゆく笹初戎

松本周二

大杉の伐らるる印冬の山

臘梅の闇より出でてほんのりと

初場所や短き鬘の勝ち名乗

田中清秀

早咲きの梅に掛けたる願ひ絵馬
テーブルに手袋忘れ春隣

初釜の残り香漂ふ朝かな

重野善恵

早や七日七種揃はぬ粥啜る

埋火の炉辺仄かに暖かし

寒鯉の鰭ゆるやかにたわみをり

小柳千美子

寒月の岩突き通す光かな

連獅子の所作台響く春隣

寒酒是那智御滝の盃に受け

今泉由利

冬の日は千年杉を洩れきたり

同じきはひとひらも無く雪は降る

泥のまま葱放り出す厨口

刻限に急かるる小道枯律

老人も歌のけいこや春隣

米田文彦

身のうちを確かむ旅や花八手

柚子湯して夢の中までかぎろえり

植村公女

漢方の胃薬の甘し漱石忌

とつときの話をしよう夜の桜

晩節のひと日暮るるや柿若葉

母と児の声音やはらか姫女苑

かさね吟行会

「清澄庭園」 一月

田中清秀

平成二十八年正月八日、本年初めての吟行会は江東区にある都立文化財九庭園の一つ清澄庭園で行われた。こ
こは庭の中心の大泉水に三つの中島を配置し水面に島や
数寄屋造りの建物、樹々の形を映し出す、また、全国各
地から集めた名石を敷石や橋、磯渡りとして数多く配置
している。明治の庭園を代表する回遊式林泉庭園である。

平成二十五年七月二十三日、亡き佐藤喜仙主宰が企画
した吟行兼納涼会をここで開催して以来である。今年は
暖冬で正月からばかばか陽気が続き今日も四温晴れの長
閑な天候となった。早速に入り口近くの寒牡丹が掛樋の
脇で美しく迎えてくれた。

笑顔もて亡き師も来ませ初句会

千美子

恋といふことの湧きこよ寒牡丹

由利

池端には幾人か熱心に絵具の筆を執り写生に余念が無

い、池には鴨の一種キンクロハジロが陣を張りその数は
池を覆い尽くすと言っても過言ではない。鴨がお互いの
間隔を保ち陣形を作るのは敵から身を守る知恵なのだろ
うか。その空の上をユリカモメが悠々と飛び回り、そし
てアオサギが不動の姿勢で何時までも岩に佇み魚を狙っ
ている。そんな景色に見とれ、皆作句を忘れてベンチに
座り寛いだ時を過ごす。

一枚の水に動かぬ鴨の陣

正規

鳥ごとに縄張りあるや鴨の池

皓一

一羽のアオサギが餌を求めて我々の間近に飛来し見つ
めたまま動かない、さらに人懐こいスズメも寄り来て冬
の温い日差しがなんとも長閑である。

目の前に鷺の飛び来し日向ぼこ

礼子

浮島の鷺の睨むは鴨の陣

陽子

千両、万両の実は共に冬の花の少ない季節を彩る大切
な植物でその実は正月の縁起物である。今回は万両が多
く見られ葉の下に赤熟した小粒を沢山に実らせ庭園を賑

やかしていた。また、水仙もその香りを漂わせながら咲き出している。水仙の学名はナルシスと言いい、水面に映る自分の姿に恋をする神ナルキッソス（ナルシストの由来）のギリシャ神話から来ていると言う。その花言葉は「自己愛、自惚れ」でプレゼントに使うのは要注意かも知れない。そして広場では数人の松手入れの職人が心地よく鋏の音を響かせ枯れ芝に松葉を折り重ねもうすでに春の準備である。

冬ぬくし季節はづれの松手入

水鳥の水脈引く池の輝けり

清秀

素山

この庭園は紀伊國屋文左衛門の屋敷として作られその後明治になり岩崎弥太郎の邸宅として使われ、又、岩崎家から東京都に寄付されてから新たに修復整備されて都の名勝として保存されている。他の都立の文化財庭園も吟行で訪れているがやはりここが優雅さでは最も優れているのではないか。特に句会を開催した涼亭は座敷からの景色が抜群で三方がガラス戸で囲まれ見渡しが良くその外側を池に面して濡れ縁が作られゆつくりと庭を鑑賞することができる。

磯渡り涼亭に見る初景色
寒つばき鷺のたたずむ伊予の石

京子
しのぶ

涼亭での初句会は正月であり昼食で新年を言祝ぎながら一年の精進を誓い乾杯を行った。食事の後は席を替えて囑目三句各々自作を披露し選句の上いつも通り盛会のうちに句会は無事終了。そして近場のレストランの二次会で更なる俳句の上達と会の隆盛を誓いもう一献、そうして本年最初の吟行会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 三月十一日（金）

場所 羽根木公園

集合 小田急線梅ヶ丘駅 十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（四七）

丸山 酔宵子

『京都の紅葉と鳴き龍と』

地球温暖化の影響が京都の紅葉にも見られるようで、今年の京都の紅葉は今一つであるようだ。鮮やかに紅葉する気象条件は3つあり、日中の気温が20～25℃、夜間は5～10℃で、昼夜の寒暖の差が大きいこと。空気が澄んで葉が充分日光を受けられること。そして大気中に適度な湿度があつて葉が乾燥しないこと。この理想的な紅葉化条件を満たしている通年の京都であれば、11月から12月初旬までが紅葉の季節であるが、確かに今年は異常気象で、鮮やかな紅葉は見られずすっかり色褪せてしまったようだ。

12月の初旬、桂川の渡月橋（とげつきょう）には雨にもかかわらず、外国観光客で一杯。天龍寺の境内、夢窓国師の曹源池庭園を前にして、神妙な姿で庭に見入って

いる人や自撮りの人々……。天龍寺では所々に紅葉は残しているが、借景の嵐山も残念ながら紅葉は終わっている。

しかし、天龍寺の塔頭（たっちゅう）寺院である宝厳院（ほうごんいん）は、将に別世界、紅葉真つ盛りである。天龍寺の脇道の細い道を桂川方向にしばらく行くと、嵐山羅漢の杜があり、その右手に苔むした茅葺屋根の山門がひっそりと佇んでいる。山門前の小道には見事な紅葉の絨毯で、『さーっつ、京都へ行こう！』のテレビコマースヤルを見ている様。天龍寺の人込みとは別世界で、外国人観光客は皆無で、土曜日にもかかわらず、日本人カップルもない。

庭園「獅子吼の庭」は、嵐山の景観を巧みに取り入れた借景式枯山水庭園で、その名にある「獅子吼」とは「仏が説法する」の意味とのこと。確かに、小雨の中、人っ子一人いない庭を散策すると、鳥の声、風の音が耳元に鮮やかに聞こえてきて、本当に心が癒される。また、青い苔の上に紅葉が散り且つ積もり、赤と濃い緑のコント

ラストも素晴らしい。期間中は夜間のライトアップがあるそうで、さぞかし幻想的で幽玄な世界が広がることであらう。こんなところで、紅葉の散るのを見ながら、紅葉の一葉が白磁の酒器にひらひらと……。是非一度、優雅に雅（みやび）な世界で一献楽しみたいものである。

雨も止み、まだ昼下がりの嵐山。まだ夕刻までに十分な時間がある。はてどうするか……。そういえば相国寺で狩野光信作の『鳴き龍』で知られる特別展示があるとの噂を聞き、それではと阪急嵐山線を乗り継いで、京都中心地へ。

相国寺は京都地下鉄の今出川で降り、同志社大学横にある広大な敷地の臨済宗の禅寺である。これも幸いなことに外国人観光客は皆無で、まだ紅葉の残る境内は閑散としている。広い境内の法堂にお目当ての『蟠龍図』がある。広い天井一杯に描かれた龍は、どこから眺めても追いかけてくるように見える。龍の眼の下に立って手をたたくと、法堂に反響した音が、まるで龍の鳴き声のよう聞こえるのである。木製の高い天井に起伏をつけ、

丁寧天井絵を描いた様は、ダ・ビンチを彷彿させる。静かなひっそりとした境内の中で、一人静かに古をしのぶのは、飲んだくれの身としては久々の命の選択のひと時である。

紅葉且つ散る法堂の龍が鳴く

酔宵子

本からのあれこれ(4)

米田文彦

姫路の街を先輩と歩いていて、「こいつの本はおもしろえぞ、あんたも暇だったら読んでみる」と言われたことがある。井上ひさしの「吉里吉里人」だったと思う。とても分厚い本であり暇でもなかったものでそのままにしたが、数年後、「不忠臣蔵」という本で井上ひさしを初めて読んだ。勤めてくれた先輩は兵庫県赤穂に住む人で、私の読んだ本が忠臣蔵関連というのも妙な感じだが、作者特有の饒舌とユーモアの世界にどっぷりと浸ってしまった。

忠臣蔵は歌舞伎のご存じ仮名手本忠臣蔵から映画演劇、講談「赤垣源藏徳利の別れ」「雪の南部坂」、三波春夫の浪曲歌謡「雪を蹴立ててサク、サク、サクサクサクサク、先生！おお、蕎麦屋かあ！」まで各種取り揃えられている。

そして浅野内匠頭、吉良上野介はじめ人物・事件に対してもいろいろな見方がされているが、この本は討ち入り

に参加しなかった人、できなかった人、いわば忠臣になれなかった人々について、作者がその事情を虚実織り交ぜた想像力でこしらえあげた小説であり、その数は十九人になる。

従来から討ち入りに参加しなかった人たちの物語はあるわけだが、この小説ほどその事情を各種取り揃えて作り上げたものを私は知らない。

そして企業社会に出てだいぶ年数も経ち、物事にはいろんな事情がある、表も裏もありそれが単純に良い悪いということとは言えないことも多い、などがわかってきた頃だったことも相まって面白く読んだのだと思う。

その事情のいくつかを挙げてみる。通説よくあるのは二つ。①討入失敗したときの第二陣として残った、②命惜しさに脱落した。この他に③足手まといになる(武芸は苦手)④同上(身体に障害)、⑤内匠頭から不興をかい以前から家臣を辞す気持ちだった、⑥仲間に疑われて潔白証明のため自死、⑦預かった金を親孝行のため流用、君臣の道を捨てた、⑧身分を見抜かれて逆に動きをカムフラージュ、為に討入に同行できなかった、⑨仮に仕え

た殿様に、ある事情から押し込められた、⑩乞食に身をやつしていたら泥棒と誤解されて殺されてしまった、⑪仲間の後々の財政を考えて脱盟、その他にも種々雑多。このぐらいいしておく。

別のことになるが、井上ひさしの書いたひとつの新聞掲載コラムが手許にある。その中で彼は太宰治の小説「惜別」を紹介して若き日に受けた感銘を語ってくれているので紹介したい。

それはこんなことから始まる。

吹雪の夜、難破してやっと岸にたどりついた水夫が灯台を見つめる。やれうれしや助けを求めて叫ぼうとして窓の内を見ると、つつましくも幸せな食事の最中である。ああいけねえ、助けを求める自分の凄惨な一声でこの団欒はメチャメチャになる。水夫は一瞬ためらった。そこへざぶりと大波が押し寄せ水夫を一呑みにしてしまう。もはや助かるはずがない。この水夫の美しい行為を誰が見ていたのだろう。灯台守の一家は何も知らずに一家団

欒を続け、水夫は一人で死んでいったのだ。月も星もそれを見ていなかった。しかし、その美しい行為は厳然たる事実である。「そのやうな、誰にも目撃せられていない人生の片隅に於いて行はれている事実こそ、高貴な宝玉が光っている場合が多いのです。それを天賦の不思議な触覚で探し出すのが文藝です。」

つまり芸術家というものは、人間のこころの中から小さな、しかし、燦然ときらめく宝石を取り出そうと苦心する人たちのことで、読者はその宝石の鑑賞者であり、またじつはそれぞれが小さな宝石の所有者でもある。この数行はわたしを激しく打ち据えた。得たものは大きかった。なにしろ、わたしは、書物を読むときの、揺るがぬ憲法を手に入れたのだから。

以上が井上の文章で、「」内は太宰からの引用である。そして私は、感銘を受けるとはこの宝石の光を見たときなのだな、今もいろいろな所で光っているのだろうか、と心に残ったものだった。

ある自然科学者の手記（46） 大橋 望彦

『鈴木威伯父の結び辞』

光子は私の母であります。今年八十一歳になりますが、極めて壮健に、若い時より却つて丈夫になりました。腰も曲がらず、視力も弱らず、足も達者、最も不思議なのは、艶は脱けても白髪二つ無い頭。従つて気持も若く、家る在つても悠々閑々として居るのが、一番嫌いです。

近頃は、人形作りに夢中の御様子で、髪形から手足の先までご自身の製造、衣装・帯紐は勿論、帯止、半襟、袖に至るまで縫い合わせて造られます。上品な古代のものから伊達姿、芝居の所作、仕舞いの姿、踊り子、舞妓のだらりもあれば、芸者の粋なものもあります。雑誌の口絵を見ては、其れを真似、何処其処で見た姿が良かったからと言って其の儘を造り、今日迄千に近い人形を造られました。傷病兵の方々の慰問として、差上げ多数丈でも、二百に達するでしょう。

旅行や遊山は極随好きで、映画観劇へもよく参られます。家で人形作り、針仕事に飽きれば、独りノコノコと外出して、映画見物とか、デパート歩きをなされ、少しでもじつとして居られません。

仕事は豆にさつさと片付け、物事に屈託や蟠わだかまりもしもなく真に淡泊であります。旅行でも芝居でも或いは食事へでも、お誘いすれば、直ぐに喜んでお出掛けになります。

若い者達に対しては極従順で、小言等決して申されませんが、礼を欠き、理に戻る場合には、厳として叱られます。子供や孫の懐き敬うのも、其為であります。

本文にもあります通り、母位皆様から可愛がられ、懐かしがられた者は少ないと存じます。幼女に、お相手に、書生に、嫁にと、諸方から懇望されたのも、落魄らくはくした武家の娘に対する同情心も幾らか手伝つたのですが、実は生来備わつた円満な美徳の現れに依るものです。

又今日の長寿を保ち、世間から幸せ者よと羨望せられますのは、母の訓と母の愛に励まされ、世の辛酸と情理とを嘗め尽くされて、曲らず、阿ねらず、従順に人生の荒波を

乗り越え参られた賜物とも言い得るでしょう。幼少時代から幾多の艱難辛苦を突破された結果、自然に人格も出来修業も積み、今日の福德田満に達せられたものと信じます。

其れ故、兄弟親戚打ち揃つて昨年、母八十歳の寿を大いに祝福致し度いと言う念願でありましたが、時節柄祝宴を止め、予々母が筆記せられた戊辰戦後の苦心談を上梓して捧ぐると共に、知人古旧へも御頒ちする事に致したのであります。

勿論文才無き私が、みなさま感動させるような名文を以て母の一生を飾る訳には参りません。その生涯を有りの儘、飾気なしに、殆ど母の書いた原文を採つて記しましたから、或いはご判読に苦しむ箇所も御座いましょう。只此の小冊子の目的とする所を御理解の上通読下さるゝならば、母は定めし満足するだろうと思います。終りに本書を上梓するに当り親友稲葉俊二君のご配慮と弟不二夫の手伝いを感じ致します。

祖父丹下重光が戦死の際所持下紙入れの中から、戊辰会津戦争の声明書とも言ふべき開戦理由書が出ました。

会津藩士の必ずしも逆賊ならざる所以が、明らかにせられて居ります。

参考の為に此処に採録致します。

昭和十六年八月

鈴木 威

以上

絹の話 (64)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

養蚕革命が始まった

【蚕糸業法】

明治以来日本の津々浦々で寝食を忘れて作られて来た繭（家蚕）も平成に時代に入る頃には群馬、山形、福島等一部の地域を除いて、殆どの養蚕農家が姿を消してしまいましたが。それに伴い絹の品質規格を維持する為の「蚕糸業法」が廃止され誰でも自由に交配させて蚕を飼う事が出来るようになったばかりか、繭は糸にしなければならぬと云う縛りも解けました。それまでの全国の蚕糸試験場などは、どうして病気にばかりにくく、沢山の均一な糸を吐く蚕を育てるか、という事に腐心しておりました。ところが水面下で糸づくり以外に試薬等の実験用動物、絹の機能性研究等が進められていました。繭は糸をとる事以外の利用は禁じられていたので、シルクパウダを作る時も、一旦、繭を糸にしてから塩酸で溶かし、ゲル化して、パウダを作ると云う遠回りでコストの掛かる事をしていました。蚕始業法が廃止されると急速に水面下の研究が表に浮上して来て、全国の蚕業試験場は廃止され、昆虫の機能性や遺伝子組換え等の分野に国や大学の研究費が集中するようになり、前任者達の

世界に冠たる厚い成果を基礎に、僅かな期間に、世界をリードする研究成果をあげられるようになりました。

良い法律（良質な均一の糸を作り、戦前の日本の主たる輸出品として、近代国家を築く資金を稼いだ）も時代が変われば発展しようとする新たな産業の手足を縛る悪法になるよい例です。

【元氣な養蚕農家】

■繭の産直型

農協等を通さず特定の呉服屋に希望する繭（品種や雄繭）を直接納品すると云う産直型です。それでも日本の繭生産を守ろうと云う（財）大日本蚕糸会等からの多額の補助金あつての事ですから安心出来ませんが！

■医療用品など製造工場

異業種からの新たな参入型の一つは、糸を作ると云う事は全く考えなくて、現代のキノコや水耕栽培の野菜と同じように、工場で無菌養蚕をして人工飼料と温度管理等を駆使して年中休まず、マウスに変わる試薬などの初期実験動物として、医療用蛋白質（抗体やインターフェロン等）や化粧品、食品添加物を作る為の養蚕事業です。アレルギーなど殆ど起こさない天然由来の安全な原料供給と言えましよう。

■遺伝子組換え養蚕事業

遺伝子組換えした蚕に人の臓器等の再生に必要な成分を生産させる事業がスタートしました。

また蛭や珊瑚等の遺伝子を組換えてブルーや赤く光る繭を作ろうとする事業も脚光を浴びています。

但し、この糸は特定の光の波長を当てないと発光しないとか、アイロンの様な熱が加わると色が消えてしまうという難問が解決しなければ大きな産業にはならないと思われます。それに加えて遺伝子組換えを管理するカルタヘナ法を順守（対処のノウハウが確立していない）しなければなりませんので、前途は厳しい物が有ります。

■昆虫以外から絹製造

絹といつても蚕に作らせるのではなく、蜘蛛の糸の様に物性面で蚕の絹より優れた絹を大腸菌の様な微生物に作らせる事業です。未だ成功とは言い難いのですが、全国から多くの投資が集まって来ているようです。

【昆虫利用の新たな産業】

■臭いセンサー

何千万年かけて進化して来た各種昆虫には、哺乳類では想像もつかない特異な優れた機能が発見されています。最も注目されているのが昆虫の匂いセンサーです。空中のほんの僅かな匂いを感じて移動するアブラムシ等は格好の研究対象です。

この機能が解明され利用出来るようになれば、麻薬取り締まりに犬などを利用するよりはるかに精度の高い感知器が活躍するでしょう。

■蛋白質製造工場

地球上で突如起るバツタの大群など、人に有用な蛋白質の大群です。世界の人口100億人時代を目前にして、これまでの動物蛋白質製造はすでに限界が見えています。蚕の様に短期間に1万倍もの人に有用な、動物蛋白質を作る生物は他にいませんので、ニワトリのプロイラーの様に食糧としての昆虫工場が世界各地に出来る日も遠くないでしょう。穀なども食品、工業製品などへ捨てる所なく利用しようと言う研究が盛んです。

長期間滞在の宇宙開発の食糧としても研究され、国連も此れ等事業を推奨しています。

■塗装の研究

また、玉虫のように色の退色しない構造色（ナノ構造の色の重なり）の研究成果も、既に食器や事務用品の彩色に使われ始めました。

身近にいる昆虫の構造、行動には未知の部分があまりにも多く、昆虫をもっと研究しようと云う流れは環境保全運動と相まって今後大きな流れになつてゆくでしょう。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

五十四回

『月虹』 鯨島 満

二十五 磯幾造 1

磯幾造は斎藤茂吉の高弟山口茂吉に師事し、のち歌誌「表現」を創刊した人である。

庭うちに落葉を焚きし跡見えて斎藤先生いますかと
思ふ
『寡黙なる日々』 昭和三十年

神奈川県箱根町にあった斎藤茂吉の別荘「強羅山荘」での作である。山荘の庭には焚き火の跡が残っていて、すでに昭和二十八年に亡くなった茂吉がさながらここに來ているかのように思ったというのである。「アララギ」の人々に「茂吉のよき秘書」と呼ばれた山口茂吉がこの三年後に没するとは作者は思ってもみなかったにちがいない。

励みつづ編み給ひし茂吉全集を終へて一年ひしやせのみのみ
命なりき
同・昭和三十三年

伴はれ斎藤先生訪ひたりし日も遙けて師の君は亡

し

同・昭和三十四年

歌は師の山口茂吉を偲んだものであるが、作者にとつて斎藤茂吉は師も同然なのである。一首目は佐藤佐太郎、柴生田稔とともに編集委員を務めた旧『斎藤茂吉全集』の仕事を終えて一年後に亡くなったことを詠む。二首目は疎開先の山形から帰った斎藤茂吉を世田谷代田の家に訪ねる山口茂吉に従ったありし日を偲んでいる。

地下足袋を穿き墓地裏のこの坂を斎藤先生も曾て来
ましき
同・昭和三十五年
斎藤先生曾て来ましし道源寺脇の坂道に汗あえて佇
つ
『反照』 昭和四十八年

右の三首に詠まれている坂は山口茂吉の家に行くための道である。三首ともに斎藤茂吉が歩いた坂道を偲ぶ歌である。一首目。茂吉が金瓶、大石田疎開中、散歩の時には地下足袋を穿いていたことで知られるが、帰京後も手放さなかったことがわかる。三首目は弟子の山口茂吉の病が篤かった二十五年前とあるから、通信病院に入院、手術した昭和二十三年のことということになる。この時、茂吉はその手術に立ち合っている。

佐藤佐太郎氏伴ひ斎藤先生懇ろに愛弟子見舞ひたま

ひぬ

『夕丘』平成二十年や

「先師追慕 山口茂吉先生没後五十年」と題する中の一首である。詠まれている佐藤佐太郎は柴生田稔、堀内通孝と並び称される山口茂吉の兄弟弟子である。茂吉は何度も山口茂吉を見舞い、山口茂吉の弟子である作者もまたそのことを繰り返し詠んでいる。この年、作者は、

代田なる斎藤先生訪ねしが昼を閉ざして床にあまし
き 同

これは師の山口茂吉に先立たれたのちのことを詠んだものと思われる。

新しき思想いちづに気負ひたる若き日のわれも許し
給ひき 坂多き街 昭和四十一年

題に「斎藤茂吉先生」とある。師の山口茂吉のお供で斎藤茂吉に直接会った時のことであろうか。

おほらけき君がみ歌を刻みたる碑は立つ山の上の苑
同・昭和四十二年
苑深く立ちます君が歌碑のまへ秋日は櫟の落葉にぞ
差す

箱根の強羅公園に建つ斎藤茂吉の歌碑を詠んでいる。歌碑には「おのつから寂しくもあるかゆふぐれて雲は大きく谿に沈みぬ」（『ともしび』所収。昭和三十年建立）が刻まれている。

磐水引かぬ和紙ゆゑ絵具滲めれど茄子も南瓜もさな
がらにして 同・昭和四十四年
並べたる南瓜二つが描きあり戦後をながく餓じかり
にき

君がうたにしばしばあれば愛しみし萱草のはなもこ
こに描かる

題詞に「斎藤茂吉先生展三首」とある。斎藤茂吉は多くの水彩画を残してあり画集があるほどである。一首目の「磐水」は墨やインクや絵の具などが滲むのを防ぐための液体で、膠液の中に明礬を加えたものである。絵は和紙に滲んでいるが描かれた茄子、南瓜は実物そのものだといふのである。

三首目。茂吉には、「萱草の小さな小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ」（『赤光』明治四十二年作）をはじめとして萱草を詠んだ歌が何首もある。萱草はユリ科の多年草で、夏、橙色の花を一日だけ開く。春の新芽は食料となる。

楽しい時間 40

山本紀久雄

2016年1月31日

パリスの審判（4）

人間が自信を持つには何かのきっかけが必要だ。ワインも同じである。1976年5月24日のパリスの審判は「カリフォルニアは世界レベルの高級ワインを作ることができる」と自己認識させた。

そこで、当時のタイム誌による報道を振り返ってみたい。「パリスの審判」記事は次の書き出しだった。

「月曜日の昼下がり、パリのインターコンチネンタル・ホテルで、フランスのワイン界を代表する9人の審査員が2時間以上にわたり、ワイングラスを回し、香りを嗅ぎ、口を含み、吐き出した。バックラスも顔負けの試験能力で審査員が1位に選んだのは、赤、白ともカリフォルニアの新興ワイナリーで、白はシャトー・モンテレーナ、赤はスタッグス・リープ・ワイン・セラーズであった」。

記事の最後は、モンテレーナのシャルドネを1位に評価したクリスチャン・ヴァネケの「モンテレーナは非常に飲みやすく、バランスの取れたワインで、熟成により質の向上が期待できる。今後とも目を離せない」というコメントで締めくくった。このコメントが、カリフォルニア・ワインに対するフランス審査員の意見を代表すると思ったからである。

このパリ試飲会の記事が載ったタイム誌が、ニューヨークの

新聞売り場に並んだのは1976年6月7日で、「モダンリビング」コーナーの58ページに、『パリスの審判』と題して「パリ試飲会」の記事がひっそり掲載された。

記事の要点は「先週、パリのスパリア氏主催ワイン試飲会で、カリフォルニア・ワインがフランス勢を打ち破る軌跡が起きた」である。

タイム誌発売日の翌日、マンハッタンのアッパーウエストサイド通りとブロードウェイに面し、西86番街と西87番街の間に、アメリカ最古のワイン・ショップ、エッカー・メラル&コンディットがある。

エッカーの店には、パリ試飲会に出された11のカリフォルニア・ワインのうち、モンテレーナのシャルドネと、フリーマーク・アベイのカベルネの在庫があつた。どちらも1本5.99ドルだった。

午前も半ばを過ぎた頃、店で仕事中のオーナーであるマイケル・ケイボンのところに店長が来て、モンテレーナとフリーマーク・アベイが売れ切れそうだと報告があつた。

不思議に思った店長は、客の二人に、何故、この2本を買うのか聞いたところ、タイム誌の話を教えてくれた。昼にはパリ試飲会のカリフォルニア・ワインは5ケースすべて売り切れた。

同じ現象は、アメリカの至るところで起きた。記事が出た翌日、ニューヨークのあるワイン店は、1位になったワインへの問い合わせ電話が400件も受けたという。

また、サンフランシスコでは、客が店に飛び込むやいなや「モ

シテレーナはないか？」と叫んだ。

これ以降、パリ試飲会は大きな話題として続いた。

1 当時、最も影響力のあったワイン・ライターは、ニューヨークタイムズ紙のフランク・プリアルで、毎週水曜日に「ワイン・トーク」というコラムを担当しており、二週連続6月9日と6月16日でパリ試飲会をとりあげた。

2 ニューオーリンズのタイムズ・ピカユーン紙は6月16日「カリフォルニア・ワイン、フランス勢を撃破」と見出しをつけ掲載。

3 これ以外にも多くの媒体がパリ試飲会をとりあげ、一気に全米に広がった。

これ等の報道によつて、アメリカのワイン業界は、フランス人審査員、即ち、世界最高レベルのワインのエキスパートが「カリフォルニアは世界レベルの高級ワインを作ることができる」と認めた」と自己認識したのである。

その一人、ロバート・モンダヴィも「パリ試飲会事件は、カリフォルニア・ワインの歴史で大きな転機になった。カリフォルニアが一夜にして高級ブランドに変身したのだ」と語った。

このように結果として、箔がついたことで、カリフォルニアの生産者は値上げを始め、ワイン業界は潤い始めたが、それはマーケティング・セオリーを確認したことになった。

それまでは、アメリカ産ワインがどれほど素晴らしくしても、アメリカのワイン・スナップ連中は認めようとしなかった。素人とバカにされたり、身びいきと思われるのを恐れてのことだった。

このスノビズムを打ち破るには二つの方法がある。

一つは、ラベルを隠して、比較試飲すること。

もう一つは、アメリカ産ワインをヨーロッパに持つて行き、相手の土俵で戦うことだ。

1976年5月24日の大事件は、勿論、前者であり、このセオリーを証明したのである。

ここで話を、現在の日本ワイン界の実態を見てみたい。

最近、日本ワインが美味くなつて、世界でも通用すると喧伝されだした。確かに、その傾向にはある。だがしかし、ワイン全体への評価レベルはまだまだ低いといわれている。

特に問題なのは、日本政府の招宴外交力の重要な一部を構成する晩さん会において提供されるワイン、これがアメリカやイギリスに大きく後れをとっているらしい。

2014年のオバマ大統領を迎えた宮中晩餐会、供せられたワインは、ドン・ペリヨン1998年、ルイ・ラウールのコルトン・シャルルマーニュ1999年、シャトー・マルゴー1994年の三銘柄で、全てフランス産である。これがホワイトハウスなら「1986年に大塚食品が取得しているリッジヴィンヤーズが選ばれただろう」というワイン関係者が言う。何でもフランスという概念から離れられないのだ。日本外務省のワイン情報力の脆弱さを示すものだが、日本国内産ワインの品質評価も影響している。次号では、そのあたりに触れたい。

楽しくマナー ⑨

辻 照子

「素敵にパーティー」

テーブルをセッティングして食べ物やドリンクを用意すればパーティーが始まります。

○ティーパーティーはお菓子（できれば手作り）を口当たりの違うものをたつぷり用意することがポイントです。

ドリンクは、紅茶やコーヒーなど、話題性のあるものを考えて用意すると、そこから会話が弾み楽しくなります。

○カクテルパーティーは大きなテーブルに、二口サイズのカナッペ類を用意します。フォークやナイフを使用しなければ食べられない料理やソースたつぷりのものは適しません。

手でつまんだり、トウースピックで刺して食べるようなものが正式です。

ドリンク類はシェリー、カンパリ、ワイン、シャンパン、ブランドー、カクテル（ジントニクやソルティドッグなどあまり難しくないもの）を用意します。

○ビュッフェパーティーはできるだけ「フォーク」本で扱える形状にし、ソースが流れるような料理は避け、冷めても味が変わりにくいものを用意します。

カクテルパーティーやビュッフェパーティーはスタイルとしては立つままという事が多く、お皿とグラスをもつて会場を泳ぐように移動し、皆と交流を深めます。料理を並べてあるセンターテーブル

に取り皿を置いて場所を占領するのは大変迷惑でタブーです。

○ポットラック（持ち寄り）パーティーのポイントは、同じ素材や味が重ならないよう分担を事前に打合せをします。

先走って他の人が受け持った料理まで入り込むことはタブーで、料理の盛り皿は作った人が持参するようにします。会場となるお宅のホステスがテーブルをセッティングしたりお花やコーディネートをチェックし、スムーズにパーティーを進行させます。

○ディナーパーティーはおもてなしをする人（ホステス）が、料理を作りサービスしゲストと一緒に食べ、そしてお皿を片付けなければならぬので、無駄のない動きをし尚且つ会話を楽しめるようにプランをたてます。ゲストの皆さんと会話を楽しめるように、料理を大皿に盛ってテーブルでサービスするのは良い方法。

ドリンクを担当したり、ホステスが席を外している間の座を持たせたり、使用済みの食器を片付けたりするのがホストの役割になります。

○庭でランチやディナーを楽しむのがガーデンパーティーで、バーベキューもその一つです。

緯度が高くなかなか太陽が沈まないバリ郊外の夏の夜、週末になると知人が訪れて庭にあるテニスコートでテニスをしてから、ガーデンパーティーをしたり、アメリカ、グランキャニオン近くの乾燥し暑いフェニックス（アリゾナ州）では、涼しくなる夜を待つプールを囲んでカジュアルなホームパーティが開かれ、多くの人と交流を深める良い機会でした。

どのパーティーでも基本は会話を楽しむことで、会話がご馳走

で、おもてなしという事を忘れずに。

○パーティーは楽しいだけでなく、生活の範囲が広がり、新しい友人が出来るメリットもあります。ちよとしたマナーを心得ていれば、より楽しいひと時を過ごせます。

○親しい友人たちを招いてのホームパーティーは電話やメール連絡だけでも大丈夫ですが、時には改まった気分です招待状または案内状を、フォーマルなもので1か月前、カジュアルなもので1〜2週間前に連絡を。パーティーの場所や日時はもちろん、招待か、会費が必要な案内かをはっきりと明示するよう注意します。内容が曖昧だと返事に困ります。返事は2〜3日のうちに、返事をせずに行ったり、予告なしに他の人を連れて行ったりすることはタブーです。行けない場合は長々と伝えるのではなく「伺いたいのですが、ほかの用事と重なってしまい」などと短く、けれども残念な気持ち相手に伝わるようにします。

今回の試飲ワインは〈カステルブレザック ボルドーの赤と白〉
〈ピニヤ マイポレゼルバ ビトラル シャルドネ 白〉

*ポークのさっぱりおろし

材料(4人分)

豚薄切り肉320g 片栗粉大3 サラダ油大5



A (酒大2 醤油大1 みりん大1 ニンニク・生姜すりおろし各小1 塩・胡椒少々)

B (ポン酢大2 柚子胡椒適宜 大根おろし大4) ネギ4cm 作り方

①豚肉は二口大に切り、Aに漬け込み片栗粉をまぶし、フライパンにサラダ油を熱し揚げ焼きにする。

②Bを合わせ①に添え、細切りのネギをのせる。

*白身魚のマヨネーズ焼き

材料(4人)

白身魚4切 塩・胡椒少々 A(マヨネーズ大2 醤油小2 おろしにんにく・山椒各少々) プチトマト4個

作り方

①白身魚は塩・胡椒をしAに漬け込み、皮目を上にして210℃のオーブンで20〜25分焼き、プチトマトを添える。

*キャロットケーキ

材料(4〜6人分)

A(人参すりおろし100g 卵2個 砂糖60g サラダ油大1強 薄力粉100g ベーキングパウダー5g)

作り方

①ボールにAを入れ、混ぜ合わせ、薄力粉とベーキングパウダーを加え混ぜ、バウンド型に入れ180℃のオーブンで30分位焼く。

「歴代天皇御製歌」（五十二）

貫名海屋資料館

「後深草天皇」（第八十九代）在位一二四六年（四歳）・一二五九年（十七歳）

後深草天皇は、後嵯峨天皇の第三皇子。この御世。後嵯峨法皇の院政がおこなわれ、後嵯峨天皇の第七皇子、龜山天皇に皇位を継がせ、皇位継承者として後深草天皇の系統、持明院統と龜山天皇系統、大覚寺統と、「歴代天皇」「歴代外天皇」、「南朝」「北朝」を生む。

日蓮が法華宗を唱えた。

石清水ながれの末のさかゆるはこゝろの底のすめるゆゑかも

（玉葉集）

さかゆべきほどぞ久しき伏見山生ひそふ松のえだをつらねて

（増鏡）

「歴代天皇御製歌」(五十三)

貫名海屋資料館

「後宇多天皇」第九十一代・在位一二七四年(八歳)・一二八七年(十二歳) 鎌倉時代

後宇多天皇は、龜山天皇の第二皇子。在位中は、龜山上皇が院政をとられた。

「両統迭立」、龜山上皇と後宇多上皇と二代にわたって「大覚寺統」で院政をされた。

この御世、蒙古襲来(元寇)があった。

竹鷺(元享三年―三三三―龜山殿七百首)

うぐひすの千代のはつねはさゝたけの大宮人に春やつぐらむ

苗代 せきかくる苗代水のさままにわくるや人のこゝろなるらむ

田家早苗 山ざとの門田のおもに水こえてすゞしくけふは早苗とるなり

掛樋水かけひのみづ 聞くまゝにかけひの音も絶えぬなり夜のまにこほる谷川の水

竹霰あられ さゆる夜の寢覚のとおとづれて竹の葉そよぎ降る霰かな

平野 今もなほ民のかまどのけぶりまでまもりぞすらむ我が國のため

神祇 ちはやぶる七代五代ななよいつよの神世より我があし原にあとを垂れにき

「歴代天皇御製歌」(五十二)

貫名海屋資料館

『龜山天皇』(第九十代) 在位・一二五九年(十一歳)・一二七四年(二十六歳)

龜山天皇は、後嵯峨天皇の第七皇子。後嵯峨上皇の院政は続き、龜山天皇が親政をされたのは最後の二年間のみ。龜山天皇の讓位された秋十月、蒙古・高麗の兵約二万三千、日本遠征軍を差し向けた。皇室も、幕府も、全国民一体となつてこの国難に対処した。暴風によつて蒙古兵船が壊滅する天運に恵まれた「文永の役」。

弘安四年(一二八二)、蒙古、高麗軍、再び日本へ挑戦。軍勢十四万二千人、艦船四千四百せき、博多湾に迫った時、大暴風雨の来襲により、敵は海上遠く敗走「弘安の役」。

日蓮が「立正安国論」を著し、龍口の法難の後、佐渡に流された。

僧・一遍は、時宗を唱えた。

春(弘安御百首)

よもの海浪をさまりて長閑なる我が日のもとに春は来にけり^{のどか}

世のためも風をさまれと思ふかな花のみやこの春のあけぼの

冬

きのふ今日みやこのそらも風さえて外山の雲に雪はふりつゝ

雑

あふぎみる空なる星のかずよりもひまなきものは心なりけり

神風や伊勢のをとめが袖たれて祈るひつきに我が世やすけむ

「氷魚」のことから (182) 岡本八千代

もうすぐ旧正月（二月八日）である。私の町の西浦にも今年は雪が降った。そして積つて、翌朝、その白い雪は氷の粒々になつてきらきら光っていた。久しく見ない庭の光景にしみじみとした感情が湧いてきた。

一方、火星（太陽に近い方から数えて四番目、地球のすぐ外がわをまわつてゐる惑星）に氷の家ができるのか？できないとか不思議なことが当り前になりそうな不思議。それなのに私は詩心とは「体どんな心なのか？」と探している。

現代短歌は今こそ変わつてきて、どんな心情を詠つてゐるかわからない歌が多い気がする。またそれを取りあげて、やつとわかるようになるような。歌は五七五七七になればいいのではない。キーン先生も「歌には芸術性がほしい」と日本の短歌のことを言われた。

子規は、「感情を述べるものである。リクツを述べるものではない。」と言つて、歌会や句会、文章会の山会を開いたり、また手紙歌で、友達を呼ばつて、勉強会を開いたりした。かくして自分をわかってくれる人々と楽しみを作つていった人らしい。

司馬遼太郎の「ひとびとの聲音」という本の中（497P）に出てくる人物タカジという人は、「子規の詩歌についての鋭敏な鑑賞者であつたのは、子規の俳句も短歌も、地上の美しさと

いうものの本質を、路傍に小石でも置いたようなさりげなさでひきだしてくれるためであつたといえる。」と言つていた。

ここでまた、子規の明治十七年頃にもどつてみる。——坪内稔典先生著の「正岡子規・言葉と生きる」（岩波新書）を参考にして書いてゆく。

子規は、明治十七年九月に東京大学予備門（十九年四月に第二高等中学校と改称）に入学、二十一年九月に予科から本科へ進み、二十三年七月に第二高等中学校を卒業する。この時期「筆まかせ」というノートを書き残したのであつた。これは、子規の初期隨筆として、講談社版（子規全集十巻に収録されている。「筆まかせ」の「比較」と題した記事には「時鳥」の句、

・ 鳴かぬなら殺してしまへ時鳥（信長）

・ 鳴かぬなら鳴かしてみよう時鳥（秀吉）

・ 鳴かぬなら鳴くまで待とう時鳥（家康）

が載せられている。激しい気性の織田信長、何事も力ずくの豊臣秀吉、じつくりと機を待つ徳川家康というように、それぞれの個性を時鳥にたとえて比較的に見る、ものの考え方を現している。

子規は「人の詩文を見て余り善いとも思はざりしが、己が同じ題にて詩を作りて見ると矢張人の方がよき事多し、而して己と人と比較するは己を益すること甚だ少々ならず」と述べている。——さて、「いーはとぶ」の歌会の批評会は、いかがなものでしょうか？。

「土」に思うこと

夏 目 勝 弘

旅の多くは鉄道を使う、車窓からの風景は里山を背に集落が点在する。

川に沿い家が並び道が鉄道が平行している風景が多い。また内海に入江に港の周辺は漁村がある。

水なくして人間は生きてゆかれないためか、災害が付きものであるが、人びとは先祖からその地を放れない。

川や海からは多くの恵みが得られる、その恵みによる生活を選び集落をなしている。

今回の鬼怒川の洪水も想定外ではない自然界で起きるものもろを想定することなど人間に出来るはずがない。

「おふく」のなかでは、口のきけない髪結の女性が仕事先の店に、鬼怒川の堤の道を行く様子が出てくる。

「土」のなかの勘次も唐鍬の修理に鬼怒川を渡り鍛冶屋に行く様子がある。

また「土浦の川口」のなかの行には「俺ア十三に水海道に居たところがあつたけ・鬼怒川では鮭が捕れたな、甘かつた鬼怒川の鮭は」と。

「十日間」のなかには三月三日火曜日快晴、起床冷水浴、風が吹くので冷たい、食欲なし腹こなしに村外れの畑の中を鬼怒川の土手にでてまはりした」と節の散歩道にもなっている。

「土」を読み明治の小作人の生活と自分が生きてきた昭和二十年ごろの生活はあまり違いがない。

四月になれば川魚が動き出す。川魚は大切な食料となるため釣りに行かない日はない。

また赤土の原野を勘次と同じように唐鍬で開拓をし、サツマイ

モを作った。

教科書は墨で消されたり、ページが糊付けされ勉強できるところなど無いほど。

体育など出来ない、運動場は全面サツマイモ畑である。

学校の周囲は茶の木の生垣・五月になると全校で茶つみをし、お茶を作った。

炭も区有林から木材を切り出し、校庭の隅の炭窯で炭とする。その火の番は学校の近くの生徒が当るため、そのつど夜通し火の当番であつた。

豊川の対岸にある麦畑まで渡舟で行き麦を刈り脱穀をし、うどんやパンに交換し給食になる。秋は裏山に茸取りに行き給食の汁に。

学校では教科での勉強はほとんどない、生きるためとの食料集めがほとんどであり家に帰ってから、食べるために働いた。

「土」の勘次と同じような生活をした自分ではあるが、心は人間性はそれぞれの個性を持った人間となっていく。

時代によりまた社会情勢等々により違いはあるが、最終的に個人の日々の思が何であるかによつて違ってくる。

一日のうち何を一番多く思つて生活してるかによつて、その人の人格は形成されてゆくのではないだろうか。

自分はそう思つて念を常ににつにして目覚め一日を生活することになっている。

日々が完全ではありえないが、床につくとき反省し、修整するようにしている。

ただいえることは想定外と言えることは自然界には何つもない。一葉が散るのも偶然ではない。自分に起きる結果に偶然は無いと言われている。良い事を思い続け行動すれば、良い結果が、直ちに出来るとはかぎらないが。

編集室だより【二〇一六年 一月】

三河アララギ賞 伊藤忠男様

温度2度上がるを防ぐ温暖化指針ありても策伴わず

ハイクオリティなことごとを、現役の仕事としつつ、その時々を、短歌の言葉とリズムで捉える、貴重な短歌です。

○ニューヨーク発注の、三段重の「お節」が届けられ、人並のお正月を迎える。

○天田愚庵さん「西国三十三所巡礼」に出掛けられた京都「三寧坂」へまです行く。

○京都での見聞の後、京都駅より「くろしお号」に乗り、白浜に着く。

道中、ほとんど平野でない紀伊半島をゆく沿線風景、みかんの木の地域、梅の木の地域…

○アドベンチャーワールドへ。同行の友人が、七頭のパンダのうち二頭の名付親だから。

映像ではない、ガラス越しでもない、ジャイアント・パンダの生態や繁殖などを学習できる「塾」に入る。

パンダは180gで生れること、7ヶ月かかってやっと自力

排便が出来るようになること…。取りたての竹の芽は、排気ガスや農薬、汚れが無いよう、ピカピカに洗ってあった。パンダ塾生になった私は、直接パンダに餌をあげることも経験した。良い子にしているのに飽きたのか、ひっくり返ってパタバタ駄駄っ子のパンダ。寝ても起きてても、なにをしてても可愛い。

他の動物達の存在も、自然のままに近づけている様子が伺えて安堵する。

○白浜の海辺の宿に泊る。

萬葉集にも詠まれた天然の温泉より、南紀の大海原を眺める。

○大門坂より、熊野那智大社、青岸渡寺、那智大滝、補陀洛山寺をめざす。

千年の大杉、石畳の道を、黒文字の杖について。宇多法皇を、白河上皇を、後白河上皇を…天田愚庵さんを…あとを追う。

○近畿大学の白浜実験場の見えるところ、養殖クロマグロを美味しくいただきました。

○南方熊楠博士の記念館、ここにあるのに、工事中とか、見学することが出来なかった。私の心に、いつもいて下さる博士。

○京都大学運営の、白浜水族館にゆく。ユニークな水族館。

無脊椎動物、脊椎動物、魚類、貝類、海藻、海草…ベニクラゲの、今はほんの細い紐状、やがて成体になるべくポリプをみつけた。

○南紀辺り、何と興味深い所なんだろう。もつともつと探検したかったけれど、羽田行の飛行機の時間が近付いていた。南紀白浜空港。

○山種美術館へ。「ゆかいな若沖・めでたい大観」展。

伊藤若冲生誕300年記念。勢いに力づけられ、絵姿にやさしさと微笑と、技術には頭を下げる。

○清澄庭園へ新年吟行。

贅沢に集られた石、岩、巖、磐…配置された庭園のあち、ここに春の息吹が垣間見え、東京下町風のお弁当おいしかったこと。

本当の中に居て、自らの本当の言葉が湧きだす大切な時でした。非日常的が貴重。

○ときわ台、舟蕎山。

とてもやさしい空気の漂う蕎屋さん。いつもいつも「あそこの蕎をいただきたい」と思い続けている。「せいろ蕎」をいただきました。

○EDM界のプリンス。ロシア生れ、ドイツのDJ、ゼッドの来日公演。

幕張メッセの恐竜化石展を見に行ったのと同じ会場へ。

超今。ハイテク技術により造りあげられた、何もかもを揺るがす大音響、雑味なく透き通る音に心地良く靡いた。

○やまざきさいごさんのシャンソンコンサート。

渋谷の「青い部屋」へ。

しつとりと懐かしい気持ちになりました。戸川昌子さんのステージも、超満員の満足となったのでした。

○目が覚めると、景色は真白だった。この日は、熱海へボランティアにゆく約束があり、電車に乗るべく駅は「電車遅延につき」人々が溢ふれ近寄れない。でも並んで待った。熱海に辿り着けた。

○詩吟では吟するのは漢詩が多いのだから、これを知らなくてはいけない、と思った。漢詩を教わるには「漢和辞典が要る」家中探してもみつからないから本屋へ行った。本屋にも置いてなかった。取り寄せをお願いした。

○神奈川県漢詩連盟、漢詩実作、初心者入門講座。

教程の説明。漢詩概論。辞書の使い方。詩語表の見方。漢詩の規則。

「安易に漢詩を作つてみたい」と言ったことを後悔。でも言うてしまった。

○三河アララギ、緒事項、発送…編集…。慣れない不備など、お教下下さい。お申し出下さい。何なりと対応させていただきます。

ことのはスケッチ (447) 今泉 由利

『天田愚庵』 つづき④

「和歌山」

ニューヨークより、「年末年始は日本へ行きます」「お節料理は、日本のデパートから、三十二日に東京の家に届くよう注文済み」「京都と大阪と東京での仕事の合間に、和歌山のパンダに逢いにゆく」「パンダ塾生になる予約をした」と知らせがあり、ひとり居生活は、家族という騒動となる。お正月をそそぐさと祝ひ、たちまち新幹線に乗っていた。

「NYの子達の、日本でしたいこと」の中に、私の「是非知って欲しいこと」を、さりげなく盛り込んで旅のはじまり。

○京都での仕事を終え、天田愚庵さんが「西国三十三所巡礼に出られた。産寧坂の「愚庵あと」よりはじめる。和歌山へ向けて。

今、住んでいる東京、「王子」の由来の熊野の神社。古道を歩き。那智の滝水を素焼きの盃にいただき。愚庵さんを偲ぶ。

アドベンチャーワールドの七頭のパンダに会ひにゆく。パンダ塾生だから、到れり尽くせりにパンダ達と過し、注意深く接しないと生きてゆかれない動物であること…それよりも何より、何と可愛い。

○博物学、植物学、生物学、民俗学、藻類、粘菌、菌類学…南方熊楠博士の和歌山。

東京大学の同窓生には、夏目漱石、正岡子規…。熊楠さんは、学業そつちのけで遺跡発掘や、20歳で渡米され、それよりロン

ドン、サンフランシスコ、フロリダ、キューバ…アルゼンチンのパンパにまで研究の旅をされている。那智周辺での植物調査、那智の原生林を守られたこと。記念館が立て替え中の休館。改めて出掛けることを心に決めた。

○南紀白浜の京都大学、白浜水族館。京都大学の久保田准教授と、小さな奇縁があり、ベニクラゲの研究に興味。

商業的に、観せるためではない、記録、観察という雰囲気の水族館がうれし。

ベニクラゲはどこにいらっしゃる…空っぽみたいな水槽に、ルーベがぶらさがっていた。ルーベして、とても細い糸のようなものが見えた。よくよく見ると点がある。これがベニクラゲのポリプだった。

成長して傘の大きさは約1cm。透明な体に紅色の消化器官が透ける。「捕食されない限り死ぬことはない」という。

老衰で死ぬ寸前に「さなぎ」のような状態になり、その中で細胞が若返り、生まれたばかりの姿に戻り、また成長を始める。

久保田准教授は、10回続けて若返えらせることに成功されたそうです。

ベニクラゲは、もう一つの「死なない方法」をもっている。

成熟ベニクラゲが有性生殖し、受精卵からの幼性が、岩などに付着し、植物の根のような走根を伸し、そこからクラゲ芽の形成、ポリプが成長伸び上り、分離して泳ぎだすという無性生殖でも生を続ける。

ベニクラゲの「死なない遺伝子」の組み換えが出来たら…。

○熊野の原生林は、命と心と…とにかく原点の思い湧きずるところ。ひとりでは出来なかっただろう大冒険、おかげで若返ったような気持ちになっている。

和菓子街道（113）

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

姫街道(9)

大正初期創業、現在は三代目の若旦那が中心に菓子作りをしている和洋菓子店の外山製菓。気賀町内でケーキといえはこの店だが、もちろん和菓子もみそまんから季節の菓子まで充実している。

屋号の「とやま」は、苗字の「外山」が由来。外山という苗字は三ヶ日をはじめこの地方には多いそう。前回紹介した外山本店とはたまたま同じ苗字なだけで、関係はないとのことだ。

さて、こちらのみそまんは、味噌色というだけで味噌は入れていない他店のみそまんとは違い、実際に味噌と醤油が隠し味として皮生地練り込まれている。そのため、香ばしさが強く、味噌独特のえぐみのような風味がある。焼き印のない素朴な見た目の皮は、表面はやや

固めながら、中はふんわり。しっとりとした餡は甘さを引き出す塩の味が若干強めに感じられるが、しつこさのないほど良い甘さが後を引く。



隠し味は味噌と醤油。

◆お菓子のとやま(外山製菓)

住所：静岡県浜松市北区細江町気賀129-1

電話：053-522-0321

お知らせ

△四月号の原稿は、二月二十九日(月)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六三二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができ
ます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇発行所・〒一一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yuri18@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumi.yuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美